

東京農業大学短期大学部 特色GPフォーラム

『学生主導型体験実習が拓くキャリアデザイン』

プログラム

〔第一部〕

- 13:00 学長挨拶 大澤 貫寿 (東京農業大学／東京農業大学短期大学部 学長)
- 13:05 基調講演 植村 春香 氏 (NPO法人 農業情報総合研究所 理事長)
『学生インタビューから見える本学インターンシップ制度の現状と課題』
- 13:35 基調講演 平岡 茂富美 氏 (NPO法人 かながわ就職支援研修センター 理事)
『自分の特性に合った仕事を探し出そう』
- 14:05 《休憩》
- 14:20 体験実習報告
- | | |
|----------------|--------|
| 1. 生物生産技術学科 2年 | 五島 麻依子 |
| 2. 環境緑地学科 2年 | 吉田 梨沙 |
| 3. 醸造学科 2年 | 相澤 夏希 |
| 4. 栄養学科 2年 | 斉藤 由莉 |
- 15:00 《休憩》

〔第二部〕

- 15:10 ミニシンポジウム 『東京農業大学短期大学部が目指すインターンシップの将来像』
- パネリスト 植村 春香 氏 (NPO法人 農業情報総合研究所 理事長)
平岡 茂富美 氏 (NPO法人 かながわ就職支援研修センター 理事)
丸山 敏光 (生物生産技術学科 平成19年度卒業)
白幡 乃里子 (環境緑地学科 2年在学)
金子 奈緒 (醸造学科平成19年度卒業)
稲山 未来 (栄養学科(2年在学))
- コーディネーター 藤垣 順三 (東京農業大学短期大学部 部長)
- 16:10 閉会

日時:平成21年1月24日(土)13:00～16:10
場所:東京農業大学 百周年記念講堂
主催:東京農業大学短期大学部

〔フォーラム・シンポジウムお問い合わせ〕
東京農業大学 学習支援課 GP 事務室
TEL:03-5477-2247
E-mail:gpjimu@nodai.ac.jp

特色GPフォーラム開催のご挨拶

大澤 貫寿（東京農業大学短期大学部 学長）

東京農業大学短期大学部「特色 GP」フォーラム「学生主導型体験学習が拓くキャリアデザイン」をテーマに関係機関各位のご協力を得て、ここ百周年記念講堂で開催の運びとなりましたこと心より感謝申し上げます。

東京農業大学は、1891年の創立以来、農業及び関連産業を支える農学、生命科学、環境科学、バイオ産業学で構成される他大学に例をみない特色ある伝統ある農学系の総合大学です。

東京、神奈川そして北海道の3キャンパスに大学院2研究科6学部21学科を擁し、食料問題、地球環境やバイオマスエネルギー問題、さらには人間と自然との共生問題等々、21世紀の人類の未来にさしせまっている諸課題に実学教育をもって取り組んでおります。

平成18年度に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された本プログラムは、卒業生の活躍する現場で、技術・知識だけでなく、社会人としての意識、心構えなどを学び、これらを土台に地域に貢献できる人材、さらには地域の指導者養成につながることを期待されています。

このプログラムの目指すものは、まさに初代学長横井時敬博士の実学主義に基づく教育理念を継承し実践することで、農業および関連産業が益々発展することにあります。

このフォーラムが大きな成果を挙げることが出来ますよう、また皆様方の積極的なご協力を賜りますようお願いしてご挨拶とさせていただきます。

藤垣 順三（東京農業大学短期大学部 部長）

本学は創設以来、実学教育を教育理念に掲げ、本学の農場や食品加工技術センター、調理実習室などでの実習教育だけでなく、実際の生産現場で体験する実習を40年以上にわたり実践して参りました。この実績を踏まえて「特色ある教育の取り組み支援プログラム(特色 GP)」に応募し、採択されました。

それから今日まで、このプログラムの推進のために短大部4学科の先生方が協力して真剣に取り組んできました。このプログラムのタイトルが示すように、学生自身が自分の将来を見据えて主体的に実習に取り組み、自分のキャリアデザインを構築することができるようにするための取り組みです。そのために教員が学生一人一人の希望を聞き、それを具体化するために新たな実習先の開拓にも努め、今まで以上に現場にも足を運んで受け入れ側の方々と積極的に交流を図り、共に指導する態勢をとってきました。

その結果、学生の実習に対する意欲が高まり、自分の将来像を見詰め直す機会にもなり、教育効果は著しく上がったと評価できました。また、本学教員と受け入れ側との交流が一層促進されましたし、新たな実習先を開拓することもできました。さらに、4学科の教員の教育に対する意識の高まりと学科間の協力関係が強まったことにより、新たな教育 GP への取り組みにも発展させることができました。

本日のフォーラムにより、本学のこれまでの取り組み成果がご理解いただけるものと確信しています。

本取組の概要と実施内容について

【特色GPとは】

文部科学省では、平成 15 年度から、大学・短期大学の教育改善に資する種々の取組について、国公立を通じた公募により、特色ある優れたものを選定し、広く社会に情報提供するなど、今後の高等教育の改善に活用するため、「特色ある大学教育支援プログラム」を実施しています。具体的には、各大学、短期大学で実績をあげている教育方法や教育課程の工夫改善など学生教育の質の向上への取組を更に発展させる取組の中から、特色ある優れた取組を選び、サポートします。また、選ばれた取組を社会に広く情報提供し、高等教育全体の活性化を促しています。

【取組の概要と特徴】

本学は、実学主義を教育理念として、実験・実習に力点を置いたカリキュラムを編成しています。

学外体験実習は、短期大学部の4学科すべてで実施されており、その歴史も古く、特に生物生産技術学科、環境緑地学科ではその前身である農業科時代を含めると約 40 年に亘って実施しており、今盛んに行われている「現場で学ぶ」いわゆるインターンシップの先駆けとも言える取組です。それぞれの学科の特徴と学ぶべき内容を踏まえ、本学卒業生が実習受入先となって体験実習を実施しており、その内容も時代の変化に合わせて毎年改良が加えられています。

また、近年ではキャリアデザインにも注目が集まっており、「自分の学んでいる学問がどのように社会に役立つのか」、「この学問を学んで自分の理想の仕事に就くことができるか」など学生自らが自分の将来について深く考え、行動することが必要とされています。

このような中で本取組は、大学の講義で学んだことを実際の現場において体験し、講義内容を再確認するとともに、実習を通して実社会に触れ、自らの今後のキャリアデザインの構築に役立てることができるものとなっています。

体験実習は、大きく3つの段階に分かれており、

- ①先輩達の実習体験報告を聞くことで、自分の実習希望先をイメージ・決定し、受入先とコミュニケーションを図る。
- ②実際に実習を行い、最新の技術や情報、社会を体験する。
- ③実習後、実習先から評価を受けるとともに、自らを評価しその相違を確かめ、さらに実習報告書を作成し実習体験を後輩達に伝える。

このように動機づけの段階から実習後の後輩へのフォローまでをトータルに学ぶことで学習内容の理解、学問への興味の深化、キャリアデザインの構築に役立っています。

基調講演 講師プロフィール

植村 春香 氏（NPO法人 農業情報総合研究所 理事長）

プロフィール

- ・2003年12月 農業戦隊アグレンジャー結成
- ・2004年 5月 FM世田谷「農といえるニッポン！」番組担当
- ・2005年12月 NPO法人農業情報総合研究所 理事長
- ・2008年 5月 東京農業大学非常勤講師
- ・2008年 5月 東京農業大学 食と農の博物館運営委員会メンバー



講演内容

私は、2004年5月から世田谷にあるコミュニティラジオ局、FM世田谷で「農・食・環境」をテーマにしたラジオ番組「農といえるニッポン！」の企画・制作を担当しています。番組には東京農業大学の先生をはじめ多くの学生が番組に出演してくれています。現在までに、のべ183名の東京農業大学の学生が出演しました。うち、短期大学部の学生(全学科)は72名です。

2007年4月、短期大学部の先生にご出演していただいたときに特色GPに採択された「学生主導型体験実習が拓くキャリアデザイン」のお話を聞かせていただきました。短期大学部ではインターンシップという言葉ができる前から、卒業生が現役の学生を実習生として受け入れを実施。この取り組みは40年以上の実績をもっていることや、長年の実績をベースに大学の教員、職員、学生、卒業生、保護者が一体となって新しいインターンシップの取り組んでいることについて詳しく紹介してくださいました。

私が就職するときにインターンシップ制度といったものではありませんでした。働いている先輩の声や、職場を見ないままに社会に飛び出しました。その結果、慣れない人間関係、思っていた仕事と現実のギャップに悩み続けた経験があるので、この話を聞いて学生のみんながとても羨ましいと思いました。それも勉強中に体験できるというところにとっても興味をもちました。

一般企業へインターンシップに行く学生の話は何度も聞いたことがありましたが、農・食・環境の現場に学生がインターンシップに行くというのは初めて知りました。みんなどんな体験をしているのだろうか？実際に体験にいった学生たちから直接話を聞いてみたいと思い、短期大学部 全学科の先生方のご協力のもと2年にわたってラジオ番組で学生のインターンシップレポートを取り上げました。さて、学生のレポートからいったいどんなことが見えたのでしょうか？ラジオ番組で発信した意味、学生たちの効果、問題点、今後の可能性などについてご紹介したいと思います。



プロフィール

* 鉄鋼商社に28年間勤務。人事・労務、教育・研修、総務業務を中心に審査・法務、営業、プロジェクト業務のほか、人材派遣・情報処理・生活物資卸売等の関連会社の経営支援業務を担当。50歳を機に独立・自営を志し、人材派遣会社を設立したものの、不況の嵐の中で再転職。保険代理店、ソフトウェア関連会社、再就職支援会社などの経験を重ね、多種多様な業界・職種の人的ネットワークを拡げ、『人に関わる仕事』『人のお世話をする仕事』に取り組み続けて通算39年。

* 現在は、産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、心理相談員として、厚生労働省委託業務『ヤングキャリア・ナビゲーション』、横浜しごと支援センター、茅ヶ崎市しごと相談室などで派遣社員、パート・アルバイトなどの非正規社員や若年フリーターを含む働く人々の就業相談・転職相談・労働相談を担当中。

講演内容

みなさん、こんにちは！

TVや新聞、雑誌でご存知のように、100年に一度と言われる世界的な金融危機の影響によって日本国内でも大企業・中小企業の区別なく、正規社員・非正規社員を問わず、今まで勤めていた会社を解雇されたり、退職せざるを得なかったりする厳しい状況が続いています。一方、地球規模での食料不足・環境汚染問題への対策が急がれ、「農業」に課せられた役割りがますます重要な時代になってきました。

このような社会情勢の中で、自分自身の「特性」に合う仕事を探し出し、自分なりの生きがい・やりがい・働きがいを見つけることが求められています。

食料、環境、健康、バイオマスエネルギーに挑む『東京農大型インターシップ』での実社会体験を活かし、自分の特性を活かした就職を実現すれば、どんな仕事であっても、自分のため、家族のため、友人・知人のため、そして社会のため、地球のために役立つことになります。「働くこと」は、自分の生活と生き方を支える背骨であり、自己実現への道です。これから歩みだす自分の道に自信と誇りを持ち、あせらず・あわてず・あきらめずに自分の仕事、自分の職業に取り組んでいくことを願っております。

* 本日のテーマ：『自分の特性に合った仕事を探し出そう！』

生きがい、やりがい、働きがいを求めて・・・自分探し、生きかた探し、〇〇探し』

◆自分の特性とは？ 自分探しをして、あなた自身の能力・経験・強み(Can)、興味・関心(Want)、価値観・使命感・生きがい(Must)を見つけ出し、「自己理解」によって自分に自信を持ちましょう！

◆人はなぜ働くの？ 働く目的はなんだろう？ 世の中にはどんな仕事(職業)があるのだろう？

どんな仕事が理想的？ あなた自身の仕事(職業)について考えてみましょう。

◆社会(企業・役所・団体等)が求める人材とは？ あなたのヒューマン・スキルを確認してみましょう。

◆農大型インターシップの特長とは？ 貴重な実社会体験を活かして自己実現をめざしましょう！

五島 麻依子（生物生産技術学科）

〔実習内容及び発表要旨〕

神奈川県海老名市の SATY 3F のペットコーナーハヤセガワで、10 日間インターンシップを体験しました。ハヤセガワではインコやブンチョウ等の鳥類や、ウサギ、ハムスターなどの小動物と観賞魚を取り扱っていました。営業時間は 10 時から 21 時までと遅くまで営業しており、会社帰りのお客様に対応できる体制になっていました。私は主に 9 時 30 分～18 時まで作業を行いました。作業内容は、販売する生体の飼育管理や動物用品の管理と販売を中心でしたが、お客様からの様々な質問に対して病気や管理方法についてのカウンセリングも行いました。

インターンシップでは、動物を扱う時間よりも商品の管理や接客の時間の方が多く、取り扱っている動物や商品の知識が豊富でないとできない仕事であることを痛感しました。また、今まで自分が理解していると感じていたことも、実体験を伴わないものであると相手に伝えることは非常に困難であること、物ごとを理解するということは、何かで調べた知識ではなく、自分が身をもって学んだ知識を持っていないと本当に理解したことにはならないと強く思いました。

毎日新しいことを学び自分で理解し、それを誰かに伝えることで成果が見え、とても成長できたと感じました。これからも自ら進んで学ぶ姿勢を大切に、新たな知識や技術の取得に励みたいと思います。

吉田 梨沙（環境緑地学科）

〔実習内容及び発表要旨〕

私は、狭山丘陵いきものふれあいの里センターで、環境 NGO の仕事の体験をさせていただきました。実習期間は5日間で、センターの開館閉館の準備、片付けも含めて8時半から5時半まで実習を行いました。インタープリターの方々の職場ということで、館内展示物の改善点に対する職員の方へのプレゼンテーション、トトロの森を訪れた小学生の課外授業の手伝い、ガイドウォーク体験など、インタープリターに関する様々な実習を行いました。実習を通じて、コミュニケーションを取りながらも自分の考えを如何に相手に伝えるかということ、また、それがどれくらい難しいことなのかということも、学びました。

多くのことを体験した中で、仕事をするにあたって大切なことは、知識もさることながらコミュニケーション能力だと感じました。お客さんに対してというのは勿論ですが、仲間内であってもしっかりと意思疎通が仕事を円滑に進めていくのだということを肌で感じる事が出来ました。難しいことですが、これはこの仕事だけでなく、これから先どんなところに行こうとも必要となってくると思うので、実習が終わっても、日々意識するようになっています。

この実習は、より知識を深めるだけではなく、社会に出る上で必要なことを理解できる、とても貴重な体験となりました。失敗ばかりでしたが、その経験も含めて、私が学んだこと、気付かされたことを皆さんに伝えられたらなと思います。

相澤 夏希（醸造学科）

〔実習内容及び発表要旨〕

醸造学科の醸造特別実習(二)は、清酒製造はじめ焼酎製造、味噌製造や醤油製造の実習を中心に、授業に支障をきたさない時期を利用し行われています。しかしワイン製造は、ブドウの収穫や仕込み時期が9月下旬から10月上旬頃になります。本年度はワイン製造を希望する学生を中心とした9月下旬から10月上旬の実習と清酒製造を希望する学生を中心とした2月上旬の実習の2期(前期と後期)に分れました。9月下旬から10月上旬の実習先は、房の露酒造(焼酎製造・熊本県多良木町)、マルスワイン(ワイン製造・山梨県甲州市)およびココ・ファーム・ワイナリー(ワイン製造・栃木県足利市)で実施され、実習期間は、9月28日～10月5日までの1週間でした。

私は、ココ・ファーム・ワイナリーで、ブドウの傘かけ、収穫といった畑での作業や、収穫した果実のワイン仕込み(破碎、除梗や圧搾)、破碎機、圧搾機の洗浄、ワインもろみやワインの成分分析、瓶詰めといったブドウの収穫からワイン醸造に至る一連の実習を行いました。この一連の実習を通じ、大学では学ぶことのできない、現場での多くことを学ぶことができました。また、ココ・ファーム・ワイナリーは、こころみ学園という知的障害者の更生施設に併設されています。最初は園生の方との接し方などが分からずに戸惑いましたが、園生のみなさんはとても優しく、畑作業や仕込み、食事、掃除も一緒に行いました。発表内容は、実習先の紹介、実習内容および実習において得たことについてです。

斉藤 由莉（栄養学科）

〔実習内容及び発表要旨〕

私が実習を行わせていただいた、完全入居型の介護付き有料老人ホームのゆうらいふ世田谷の大きな特徴としては、徹底された衛生管理と「楽しい」食事、という点が挙げられると思います。抵抗力の弱いお年寄りのための衛生管理では、教科書にも載っていないような器具をたくさん見ることができました。「楽しい」食事というのは、高齢になるにつれて大変な動作になりつつある食事を、毎日のものと差別化することで苦痛に思うことなく楽しんでもらうことを目的とした企画のことで、お楽しみ膳や全国おやつ旅行やお祭などがあります。お祭りには、実習期間外であったのにも関わらず私もスタッフとして招いて下さいました。通常と異なる雰囲気の中で食事をするにより、実際に調理している様子を見て視覚から楽しんだり、雰囲気を楽しんだり、衰える口腔内の感覚を補うように味覚だけではなくいろいろな感覚を使うことで、食事を苦痛に思わないような工夫がされています。これらの細かな心遣いがたくさん散りばめられていたため入居者は気持ち良く食事ができ、それによって一人一人の生活の質の向上に繋がっているのだと思いました。

始めは掃除や洗濯ばかりで栄養士としての1日は見えてこず不満に思いましたが、実習を終えて先生や先輩方のお話を聞くと、まだ1年と少ししか勉強をしていない私たちは、何年も職として働いている方々から見ると全くの未熟者であり、掃除や食器洗いくらいしか扱いようがなかったのも事実であり、そのような環境で与えられた仕事をただこなして行くばかりでなく、自分の力として発展させられるような能力も養って行かなければいけないと思いました。私にとってこの実習は、栄養士としての勉強だけでなく社会人になるための勉強でもあった2週間でした。

『東京農業大学短期大学部が目指すインターンシップの将来像』

パネリストおよびコーディネーター

＝パネリスト紹介＝

・丸山 敏光 （生物生産技術学科 平成 20 年 3 月卒業 現在農業自営）

私は福島県の須藤農場で実習を行いました。強く印象に残っているのは栽培管理法だけでなく、休憩や食事時にお話していただいた収穫の喜びや農業に対する真摯な考え方です。また、体験実習などを通じて地域の幼稚園や小・中学校との結びつきの強さを目の当たりにし、農業が地域社会や教育に貢献しているウェイトが大きいことも実感でき、改めて農業自営を決心する絶好の機会となりました。

・白幡 乃里子 （環境緑地学科 2 年在学中 平成 21 年 4 月 造園科学科編入予定）

（株）グラックで平成 20 年 3 月 10 日～14 日の 5 日間企業実習を行い、設計コンサルタントはどのような仕事をするのかをきっかけにこの業界を選択しました。公園などの緑地の設計を主にするのかと思いましたが、実習を通して管理や樹木の調査など、様々な分野で活躍する仕事であるとわかり、もっと勉強したいという意欲がわきました。現在は、住宅の緑の保全について卒業研究で進めています。来年度は、造園科学科に進学する予定です。環境緑地学科で学んだことを活かして、緑地計画を更に学んでいきたいです。

・金子 奈緒 （醸造学科 平成 20 年 3 月卒業 小江戸鏡山酒造(株)勤務）

小江戸鏡山酒造(株)(埼玉県川越市)に就職が内定したのを機に、私は平成 20 年 1 月 11 日から 2 月 10 日までの 1ヶ月間、醸造特別実習(二)と事前研修を兼ねた実習を行いました。この実習を通して自分が体力的に仕事についていけるか、清酒製造の現場が自分に適正であるか、誇りを持てる仕事かを実際に体験して確認しました。実習後はこの仕事に自信が持て、現在は、小江戸鏡山酒造株式会社の社員として意欲的に働いています。

・稲山 未来 （栄養学科 2 年在学中 平成 21 年 4 月 社会福祉法人 マザアス日野 就職予定）

私の実習先は特別養護老人ホームのマザアス日野でした。そこで実務と同時に学んだことは、高齢者施設での食事が、食べている人にとって人生最後の食事になるかもしれないという事でした。そのためにも心を込めて満足して頂ける食事を作らなければいけないことを教えていただき、私もそのお手伝いをしたいと思いました。この実習がきっかけになり、同施設に栄養士として就職する縁を頂きました。実習で感じた思いを実現していきたいと感じています。

・植村 春香 氏（NPO法人 農業情報総合研究所 理事長）

・平岡 茂富美 氏（NPO法人 かながわ就職支援研修センター 理事）

＝コーディネーター＝

藤垣 順三（東京農業大学短期大学部 部長）